



平家物語圖會

後編

四

13
2603
10



18
2693
10

平家物語圖會卷之十

目錄

- 平家諸將の首大路を引渡す。法皇瀆列の平氏院宜を下る
院の御使花方が顔焼印を當らるる圖
- 本三位中将重衡卿法然上人を清むる圖
- 重衡卿閑東下向小松三位維盛卿高野山ゆく剃髪を
千手前中将重衡卿酒を勧る圖
- 雜司女横田瀧口法師が坊を祈る圖
- 小松三位中将維盛入道入水。宗清義氣佐々木守綱藤戸の
海を渡す

平家物語圖會卷之十



小松三位維盛入道那智叅詣の圖

以上

平家物語圖會卷之十目錄終

平家物語圖會卷之十

東武 高井蘭山翁述

平家諸將の首大路を引渡せし法皇禰列の平氏院宣を下さる

壽永三年二月七日。攝關二谷ゆき討まじり平氏の頭成。十二日小都へ入平家小結

と人々へいさるる憂目とせんと悲む中ゆり。大覚寺小隱も居交る。小松三位中

將惟盛卿の北の方いと光東むく心とせむ。三位中將と云公卿一人生捕めり

と上ると安否ひあきせむとせん。或女房大覚寺小系と。三位中將殿

と本三位中將殿のゆるくと兼る。然る首成の中ゆり。左より心易う

思ひぬ。同日大夫判官仲頼以下。檢非違使及六條河原小向と。首成請取

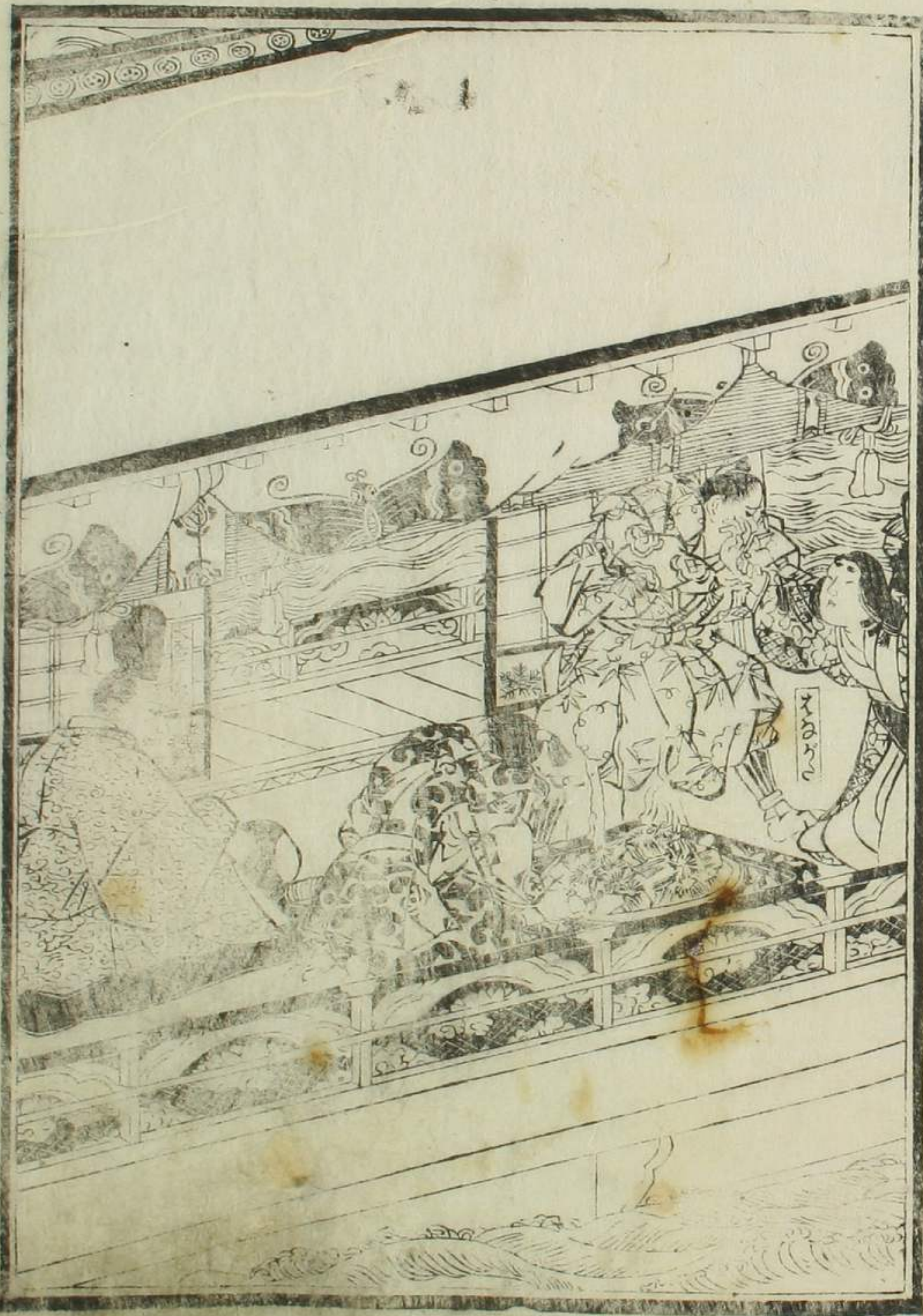
東洞院と北へ渡り。獄門小鼻らるる死す。範頼義経奏せし。法皇此をいりわん

と忍石煩ひぬ。太政大臣左右の大臣。内大臣堀川大納言忠親卿小仰合さる。五人

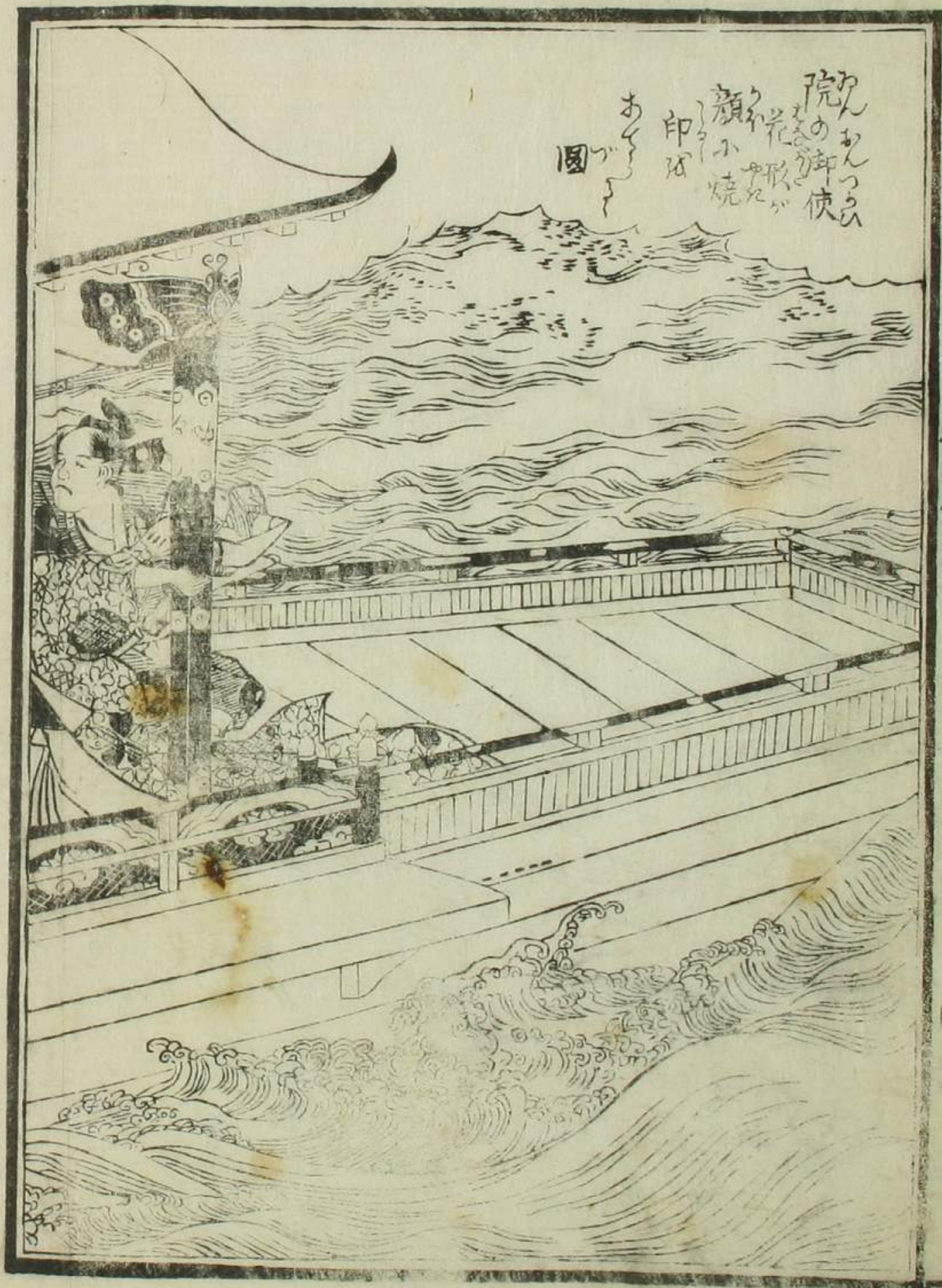
平家物語圖會卷之十

先規也。中ゆり
答くや。昔より卿相の位に至る人の頭大路を渡さざり先規也。中ゆり
此輩は先帝の時より威里の臣として朝家おはる。東國の両将より中強
ちの許容有べし。と。中より。西將重く奏聞す。
保元の昔を思ふ。祖父為義が仇。平治の古を顧み。父義朝が敵。と。君の
心憤を休め。父の恥を雪ん。命を棄て。朝敵を亡せ。今度平氏の頭大路を渡さ
ざらば。自今以後何の男あり。凶徒を退かんと。切小詰る。あふ力及せぬ。遂に
渡さぬ。と。人幾十萬と云。教を知らず。帝。綱。袖を列し。古。怖。恐。し。面々
路頭。ふ。立。高。より。下。さ。り。中。ゆ。の。浅。様。を。憐。歎。も。あり。大。覚。寺
ゆ。心。ひ。居。ら。ず。小。松。三。位。中。將。維。盛。卿。の。若。君。六。代。御。前。附。奉。り。存。藤。五。存
藤。六。あ。ま。り。足。束。と。云。姿。を。窺。ひ。そ。け。と。頭。方。八。皆。ん。知。り。と。云。三。位。中
將。の。頭。へ。こ。も。と。云。と。も。涙。塞。り。餘。所。の。人。目。も。怖。く。急。ぎ。と。歸。る。北。の。方。へ

い。ゆ。ゆ。と。問。ふ。三。位。殿。の。頭。へ。ち。ゆ。兄。弟。の。中。ゆ。備。中。守。殿。の。首。は。と。
其。外。の。誰。と。殿。と。語。り。や。せ。へ。の。上。と。云。と。云。と。位。沈。ゆ。存。藤。五。又。中。街。の。邊。
め。や。今。度。の。合。戦。播。磨。と。丹。波。の。境。ち。草。山。の。を。堅。め。を。せ。と。義。経。め。
破。く。新。三。位。中。將。殿。同。少。將。殿。丹。後。侍。從。殿。へ。高。砂。と。う。松。ゆ。八。島。へ。渡。ら。せ
多。べ。此。度。大。合。戦。と。逢。ゆ。と。乘。る。叔。三。位。中。將。殿。軍。以。前。より。大。る。の。心。勞。と
と。積。列。八。島。へ。渡。ら。せ。ゆ。と。の。度。向。せ。ゆ。と。中。者。お。逢。ゆ。と。細。く。語。り。や。せ。ゆ。
北。の。方。へ。も。我。等。が。心。苦。く。多。給。と。朝。夕。歎。せ。ゆ。病。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。
風。の。吹。日。の。今。日。の。舟。お。石。と。肝。を。消。し。軍。と。云。今。も。討。た。る。と。云。と。云。と。云。と。云。と。
と。公。を。竭。く。増。と。左。様。の。心。勞。推。し。留。り。扱。ひ。申。せ。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。
君。姫。君。も。何。の。心。勞。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。
怪。心。え。る。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。云。と。



平家物語繪巻卷六下



院の御使
顔小焼
印は
あ
園

ら。今と世に在者とよき世の命の消ゆ。未浮世のわが世と
せんと使を仕りてこの文をぞ書きたる。先北の方への都の敵充満ぬ。その置
所ふあつて成初れの貝し。のふ悲しう座らん。是へ迎へし所ゆ。ゆも成
むと。我身あそわぬ。痛りく。細く書きたる。奥の一首の歌の
何とぞも。わが世の薄草か。かくは成信とぞいふ。

稚き人との并に徒然と何とくも。是へ迎へし。言葉も
昔ら。書送る。使都へ上りて。文をまよ。北の方始披き。人の
伏沈と泣ぬ。人めも。わが世の使疾帰らん。ゆも。涙を拭ひぬ。返る。怒る。
若君姫君も。返る。ゆも。今も。迎へぬ。餘り。恋しう。美し。く。迎へし。
さ。こと。同ト。言葉。ふ。書れ。ゆ。使。八島。帰。ゆ。返。る。差。上。し。稚。き。方。く。の。ゆ。
返る。ゆ。ゆ。ゆ。方。を。く。え。ら。る。ゆ。抑。ゆ。ゆ。掘。土。を。厭。ふ。勇。者。の。腐。浮。

愛執の綱強け。浄土を冀んも。頼。唯。是。り。山。侍。ひ。都。へ。登。り。恋。し。者。
共。も。今。二。度。見。り。ゆ。後。自。害。せ。と。位。と。語。り。ゆ。同。十。四。日。生。捕。本。三。
位。入。道。重。衛。都。入。と。大。路。を。渡。る。小。八。葉。の。車。前。後。の。簾。を。揚。左。右。の。物。足。
を。閑。く。土。井。実。平。木。蘭。地。の。直。垂。小。具。足。斗。り。隨。々。三。十。餘。騎。引。具。し。車。成。
園。と。行。京。中。の。上。下。是。と。ん。ゆ。い。ら。も。在。と。君。達。の。中。此。人。の。と。か。ゆ。成。ゆ。
入。道。殿。二。位。殿。ゆ。ゆ。ゆ。の。ゆ。ゆ。二。門。方。も。重。ん。院。内。へ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。老。若。所。を。
置。り。款。符。ゆ。ゆ。ゆ。今。か。く。の。奔。ゆ。全。く。奈。良。を。焼。ゆ。佛。討。ゆ。ゆ。ゆ。六。
条。を。直。へ。河。原。迄。渡。し。夫。ゆ。帰。ゆ。故。中。御。門。藤。中。納。言。家。成。卿。の。御。堂。八。條。堀。
河。の。居。際。し。う。守。護。を。院。御。所。ゆ。ゆ。使。あり。藏。入。左。衛。門。權。佐。定。長。八。條。堀。河。を。
向。ひ。ゆ。赤。衣。小。劔。笏。を。ぞ。帶。し。ゆ。二。位。中。將。の。紺。村。滋。の。直。垂。折。烏。帽子。引。立。
と。ゆ。座。に。日。来。の。何。だ。ゆ。ゆ。ゆ。一。定。長。を。今。ゆ。冥。途。ゆ。ゆ。罪。人。だ。ゆ。冥。官。の。遇。る。心。

地せし高叔仰下さる。八島へ歸り度ハ二門の方へ云送る。三種の神器を都へ入
 幸止一然く八島へ歸さる。その氣色も中將中さる。あも我朝の重宝三
 種の神器を重衡一人の替兼とせんとも。内府以下二門の者た。うも中ゆり。女性
 めゆべり。母儀の二品をどりもさも中ゆえん。まねぐら居るが院宣を返さず。其
 其恐もいへ使ゆ中送るよそ。えゆめもぞ中ささける。院宣の使ハゆ坪の百次
 花方。三位中將の使ハ平左衛門重國と云者。大臣殿平大納言ハ院宣の類
 を中さ。二位殿ハ文細と書と進め。私ハ文ハ赦ささるゆえ。人との并ハ
 詞ゆくと言傳ら。北の方大納言典侍殿ハ詞ゆくとささる。旅の空ゆくと人
 ハ我ハ慰と我ハ人ハ慰と。物を引別れ。後ハ悲しう坐さる。契ハ朽せぬ
 物とせ。後の世ハ必む生逢さる。と泣く言傳多ハ。重國も誠ハ哀さゆえ。と
 涙を押へ立ゆけり。うあゆ二位中將年来の侍。木右馬允知時。と云者あり。八條の女

院ハ兼參の者ハゆら。土肥次郎実平が并ハ行と。是ハ年来三位中將殿
 召仕と。いひ。者ハゆら。今日大路ゆくとえゆ。目も當ら。且餘痛も存ハ
 何う若くかえき。知時をりハ脚免み。今一度ん。恭ハ。さ。昔語もやと。
 慰めまり度ハ。弓矢取身。軍ハ。供一度。唯ハ。身近う。伺候。斗
 ぬ。夫も猶。東。あ。ゆ。腰の刀を召と。計。容。家。度。と。け。土肥ハ情
 ある者ゆ。足下一身ハ。苦。う。ゆ。り。ま。あ。ぐ。腰の刀ハ。無。用。さ。と。精。を。通。
 々。中將も。知時。も。二。向。涙。と。め。と。更。ハ。言。向。ハ。良。み。と。昔。今。の。物。若。ハ。人。
 扱も。女。ハ。物。云。ハ。未。内。裏。ハ。安。さ。こ。兼。ハ。中。將。我。西。國。下。ヤ。時。
 文も。な。な。置。と。も。さ。り。と。世。の。契。ハ。皆。偽。ハ。成。ぬ。と。思。ゆ。らん。文。を。送。と。
 心。ハ。届。ハ。せん。や。知。時。安。き。ゆ。り。と。中。將。悦。ハ。頻。と。書。と。讀。さ。れ。け。る。知。時
 罷。と。ん。と。さ。る。時。守。護。の。武。士。た。の。る。ハ。文。ハ。ゆ。らん。と。叶。ゆ。り。と。中。將。も。さ。ゆ。

中下さうゆゑ。武士のいせ々。苦しかり。取せけり。知時。六傳。黄
 昏。紛。入。件。の。女。房。の。局。下。口。邊。の。声。と。覺。し。く。わ。最。惜
 け。發。ら。も。か。の。君。達。の。中。の。此。人。一。入。か。や。う。成。の。と。人。皆。奈。良。の。伽。藍。の。寺。中
 將。も。さ。ぞ。云。し。我。心。の。発。と。焼。ね。だ。惡。黨。三。つ。り。く。ふ。と。火。を。放。ち。ま。く。の。堂
 塔。を。焼。亡。せ。未。の。露。本。の。雪。の。様。あ。ま。不。我。身。の。罪。業。ふ。と。成。ん。を。わ。り。が
 實。の。左。と。覺。と。く。泣。ま。ぬ。知。時。是。れ。も。歎。く。最。惜。さ。と。わ。ひ。物。や。さ。う。と
 何。る。と。答。の。中。將。殿。の。文。の。し。り。せ。が。日。本。へ。恥。と。見。入。給。ぬ。が。定。か。と。み。だ
 う。と。み。を。え。え。の。か。西。國。や。く。生。補。色。一。の。さ。る。今。日。明。日。を。も。知。ぬ。身。の。程。必。書
 け。奥。の。一。首。の。歌。あり。く

湊川うねる流をさうりさる。今一夜のあはせもつ浦
 女房此文を顔の押當左右のとぬく歎沈まけり。知時時刻も想ひの程必書

給と帰らんとす女房泣く書ゆふが公苦ういせせ。此二年を送りしを
 あまくと書と

君ゆゑも我もはる流もも底のまのしと伝ふゆゑ
 知時歸りてのまの守護の武士の出入を。又も文を改め。苦しかり。渡
 しけま。二。位。中。將。へ。進。せ。け。る。ま。を。え。の。ひ。の。襟。や。増。ら。ま。ん。土。肥。次。郎。を。百
 と。叔。も。此。後。各。情。深。う。芳。心。せ。ん。と。辱。く。嬉。し。け。し。今。二。度。芳。思。を。夢。ま。り。し。
 吾。入。の。子。の。ま。浮。世。の。ひ。置。下。り。年。來。契。女。房。の。今。一。度。對。面。し。後
 生。の。と。成。も。云。置。む。と。存。る。い。の。わ。ん。と。や。さ。る。土。肥。兼。つ。く。女。房。あ。ま。の。い
 何。う。苦。う。ん。と。く。容。し。や。せ。中。將。大。小。悦。び。入。車。借。と。度。三。一。の。女。房。丸
 敢。ぞ。兼。と。春。う。る。縁。の。車。や。と。せ。此。う。斯。と。や。り。け。し。中。將。車。寄。迄。か。向
 ひ。武。士。だ。え。ま。い。せ。い。の。下。の。へ。う。と。と。車。の。簾。を。打。被。き。ひ。め。の。取。組。顔。の

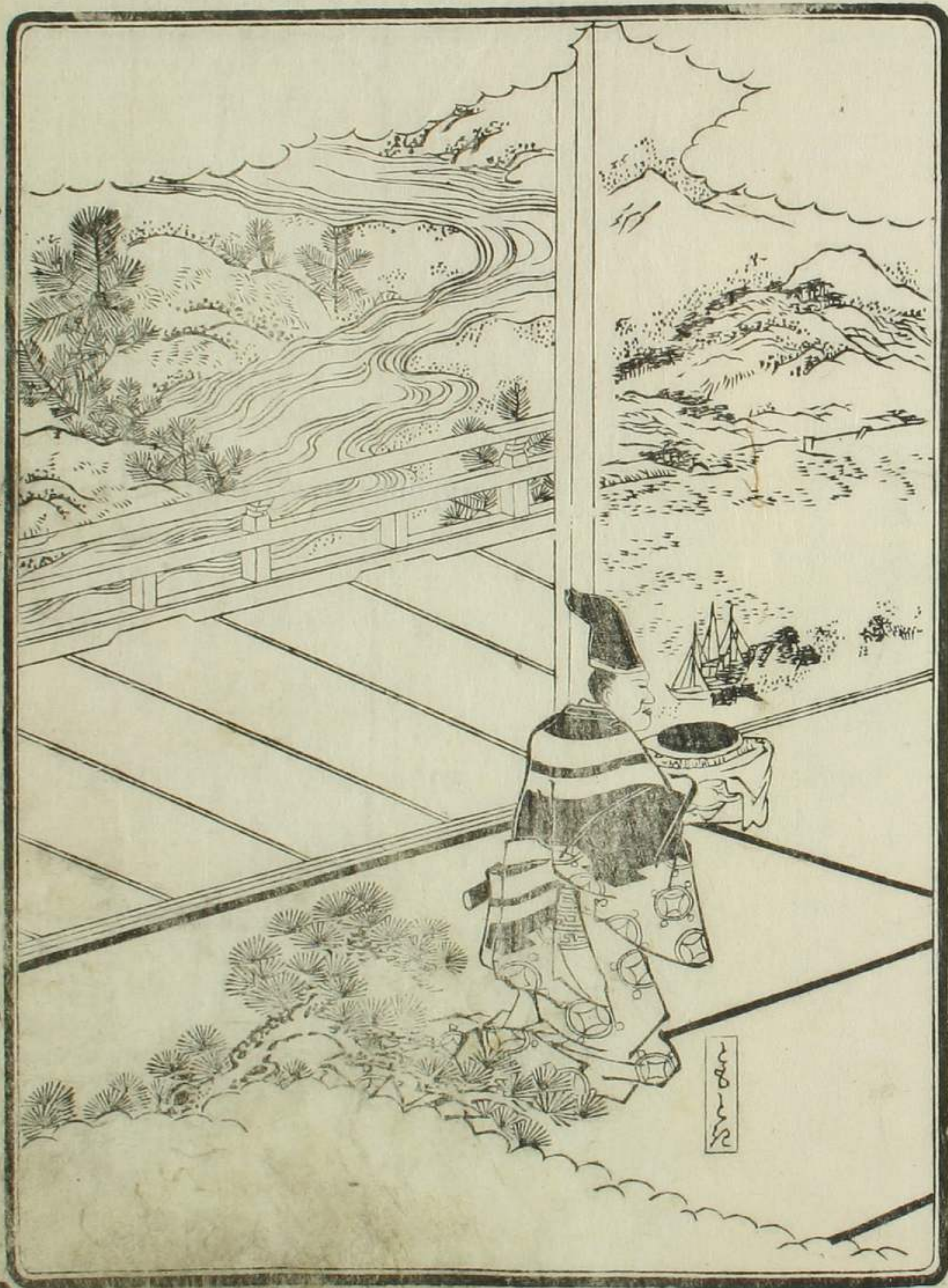
貞推當。皆し左右のて成りも宜む。唯はより外ぞあら。良きく中將女ゆも大
 方ハ云きくも一次第猶委しく治ら。今度一谷ゆといりて成る。生かか
 捕ら。是再び都へ上す。見泰しく今生の暇をもち。後世の一篇の念佛も頼
 めとのとあら。又も疾ゆ咽ひ多。女房ハ何もいふ。法くの居ら。守
 獲の武士を。此程ハ大路の狼藉もいと兼る。も疾。こや。中將カ及ぶ。守
 返る。車者。中將殿袖をひくと
 ありとも。の命も。は。今。り。限。り。ん
 女房疾ゆぬ。ひ。あ。む。む
 女房疾ゆぬ。ひ。あ。む。む

中將ハ南都へ渡る事。斬と給ひぬと。穿る。頃。と。姿。を。香。濃。里。深。心。事。も。
 彼。後。世。を。吊。ひ。ゆ。入。ぞ。良。き。く。叔。も。日。教。経。且。院。宣。の。使。花。方。中。將。の。使
 重。國。同。廿。八。日。護。列。八。島。の。碇。あ。著。と。院。宣。を。え。出。く。も。大。臣。殿。以下。公。卿
 寄。合。と。披。き。け。り。の。聖。跡。九。重。を。お。皆。列。外。幸。し。三。種。の。神。器。南。海。四。國。埋。れ
 敷。斗。を。経。ん。朝。家。の。歎。き。亡。國。の。基。に。抑。重。衡。朝。臣。ハ。東。大。寺。焼。失。の。逆。臣。を
 頼。朝。朝。臣。の。旨。お。任。せ。死。罪。お。行。る。者。え。然。と。い。ふ。も。独。親。族。お。別。生
 捕。と。成。り。龍。鳥。垂。成。恋。る。心。婦。尸。文。を。失。心。定。と。西。海。ゆ。も。國。の。事。
 三。種。の。神。器。を。都。の。還。入。せ。り。ゆ。重。衡。實。宥。せ。る。所。へ。と。あ。り。大。膳。文。夫。成。忠
 奉。と。宛。名。ハ。前。平。大。納。言。殿。と。又。二。位。殿。中。將。より。の。文。を。こ。ん。多。の。重。衡。成。今
 生。今。一。度。御。見。せ。んと。思。召。も。三。種。の。神。器。の。由。と。成。能。攝。あ。り。さ。き。あ。ひ。と。
 都。の。後。一。入。と。思。召。も。目。の。掛。り。た。と。叶。や。と。書。と。り。二。位。殿。後。文。成

中將ハ南都へ渡る事。斬と給ひぬと。穿る。頃。と。姿。を。香。濃。里。深。心。事。も。
 彼。後。世。を。吊。ひ。ゆ。入。ぞ。良。き。く。叔。も。日。教。経。且。院。宣。の。使。花。方。中。將。の。使
 重。國。同。廿。八。日。護。列。八。島。の。碇。あ。著。と。院。宣。を。え。出。く。も。大。臣。殿。以下。公。卿
 寄。合。と。披。き。け。り。の。聖。跡。九。重。を。お。皆。列。外。幸。し。三。種。の。神。器。南。海。四。國。埋。れ
 敷。斗。を。経。ん。朝。家。の。歎。き。亡。國。の。基。に。抑。重。衡。朝。臣。ハ。東。大。寺。焼。失。の。逆。臣。を
 頼。朝。朝。臣。の。旨。お。任。せ。死。罪。お。行。る。者。え。然。と。い。ふ。も。独。親。族。お。別。生
 捕。と。成。り。龍。鳥。垂。成。恋。る。心。婦。尸。文。を。失。心。定。と。西。海。ゆ。も。國。の。事。
 三。種。の。神。器。を。都。の。還。入。せ。り。ゆ。重。衡。實。宥。せ。る。所。へ。と。あ。り。大。膳。文。夫。成。忠
 奉。と。宛。名。ハ。前。平。大。納。言。殿。と。又。二。位。殿。中。將。より。の。文。を。こ。ん。多。の。重。衡。成。今
 生。今。一。度。御。見。せ。んと。思。召。も。三。種。の。神。器。の。由。と。成。能。攝。あ。り。さ。き。あ。ひ。と。
 都。の。後。一。入。と。思。召。も。目。の。掛。り。た。と。叶。や。と。書。と。り。二。位。殿。後。文。成

顔の當へんの坐する後の障子を引明。大臣殿の御前御倒伏。暫く物をも宣
 せ。良き起上。涙を押し宣は。是れ宗盛京より中将が言ふ。この無
 敷さ。實も心の中あつ。斗のて。只我の心音。三種の神器の
 能様の。都へ還へ。人をもせ。宣は。大臣殿の中。宗盛も左の存
 ト。ゆ。め。我朝の重宝。三種の神器を重衡一人の替。且。世の
 然る。且。頼朝が返り。河云。其。上。帝王の世を。保。中將一人の替。石替
 偏。此。内。侍。所。の。渡。せ。ぬ。故。こ。餘。の。子。共。親。人。と。中將一人の替。石替
 さ。る。子。の。憐。き。と。や。も。の。依。努。く。叶。ひ。と。宣。二。位。殿。世。の
 も。本。意。ち。げ。ゆ。重。と。宣。の。我。故。入。道。殿。か。ら。後。一。日。片。時。命。主。と。世。の
 代。の。わ。と。奉。ん。が。る。今。日。も。存。へ。中將二谷め。生。捕。め。せ。且。ぬ

と。後。の。胸。癢。と。湯。水。も。喉。へ。入。と。中將。此。世。の。者。と。我。を
 同。道。ぬ。教。え。と。二。度。物。を。せ。ぬ。唯。我。を。失。へ。喚。き。叫。び。多。を
 城。の。左。の。そ。と。痛。り。皆。臥。目。で。と。新。中。納。言。知。盛。卿。の。異。名。
 中。ま。げ。の。二。種。の。神。器。を。都。へ。返。入。り。重。衡。も。返。り。給。へ
 と。唯。其。様。を。恐。と。清。文。ゆ。と。給。へ。此。儀。を。然。と。大。臣
 殿。の。精。文。や。二。位。殿。の。涙。か。筆。の。立。知。も。志。を。多。す。り。
 は。く。の。返。る。と。書。の。北。の。方。大。納。言。典。侍。殿。の。言。と。宣。を。引。の。は。臥
 の。其。後。平。大。納。言。時。忠。卿。院。の。使。の。言。次。花。方。を。召。と。女。法。皇。の。使。と。
 言。の。浪。路。を。凌。ぎ。下。り。験。の。一。期。の。多。か。一。つ。と。花。方。顔
 の。浪。方。と。云。焼。印。を。せ。と。都。へ。帰。り。上。り。と。法。皇。殿。覽。と。女。の。花。方
 の。浪。方。と。云。は。浪。方。と。言。う。と。仰。ら。と。假。初。め。院。の。使。へ。か。と。成



三
家
物
語
圖
會
卷
之
二



本
三
位
中
將
重
衝
上
人
之
請
書
圖

ち
ね
上
大

三
家
物
語
圖
會
卷
之
二

ちて時忠不届程多し人知らせんを宣ひて。諸諸卿を湊平家の清文公
 續せり。我君の故高倉院の御位を継せり。主上還御されし三種の御器
 玉體を離し奉らん。二谷ゆく教輩の二類を亡がごと。今重衡一人有免
 ぞ。覚ぶる足ど。故入道保元平治の君の命を殺し。全く身の家の
 むのゆへ。ちと頼朝の父義朝謀叛依と誅せしゆを。故相國入道藤原
 の餘や宥り。其恩義を忘と。東夷を語ら。蜂起の乱を。法皇の
 其猥多し。荷膽させり。遠く入。暴祖平將軍貞盛相馬將門を討帝王
 の宸襟を安ん。近くは七父相國數度の忠節。當家數代の奉公。必百忘と
 多し。辱も。法皇四國への御幸あり。臣亦院宣を兼。再び旧都の還り。會
 密の恥を清ん。のを。高麗震旦へ。行幸の供。日本
 路も難く。入王八十一代の御宇。當也。我朝神代の灵宝。遂に空しく異國の

物と。らん。是らの旨奏聞。遂に。いへ。書を。二位中將も。此由を。言
 あり。有ん。二門の。入。思。後悔。せ。請文。到來の上。重
 重衡。卿。関。東。下。さ。定。ぬ。都。の。名。残。も。今。更。惜。く。や。土肥。を。口。く。家。せ。ん
 と。成。ら。る。土肥。九郎。尉。者。へ。中。成。院。へ。奏。聞。せ。と。頼朝。へ。入。せ。後。ち。左
 も。唯。今。の。宥。か。と。仰。也。此。旨。を。中。將。へ。さ。る。年。來。契。房。聖。二。度。對
 面。せ。ん。願。も。実。平。を。推。ぬ。や。黒。谷。の。法。然。房。を。借。り。苦。め。り。と。中
 將。致。く。聖。を。清。り。今。度。西。國。め。り。囚。と。り。登。り。後。生。の。仕。ら。御
 め。都。を。出。り。彼。所。此。処。の。戦。の。人。を。亡。し。身。を。助。ら。ん。と。惡。公。死。せ。り。善。公
 聊。も。起。ら。南。都。炎。上。の。と。王。命。武。令。相。兼。更。ぬ。私。の。受。ぬ。君。の。仕。世。險
 ぬ。道。と。難。く。衆。徒。の。惡。行。を。靜。ん。罷。向。の。如。不。慮。ぬ。如。甚。滅。亡。及。ぬ。と。
 カ。及。び。と。時。の。大。將。ぬ。ひ。一。責。一。人。ぬ。歸。し。身。二。已。の。罪。業。を。ち。今。か。く

愧を曝も則較ひと多し知とい然く頭と剃之食頭陀の行をも修技の心
 入んゆも斯る刃の心を任せい罪業の須弥より高く善根の微塵も南
 ろくかく命果んゆ火血刀の苦果疑ひう願ふ上人慈悲を起し憐を
 垂多のの善悪人も助るべ方便の示し身とやさる上人涙の咽び俯臥て
 兎角のともあり良きくやうう滅を受ぐ死人身を受ちま空しく途ぬ
 婦ややなえんと悲む餘りあり今も悪心を捐善心を起さる三世の諸
 佛隨喜し多んか離の道區さやせむ末法濁乱の機ゆ於名を勝とり
 志を九品分ち行を六字の縮とみら思疑無智の者も唱る便あり
 罪深しとく卑下とく十悪五逆廻心して往生を遂功徳少くも望
 を絶べらる一念十念の心を致せば来迎と専於名號至西方と釋しと専ら名
 号と餘も西方面至す利劍即是弥陀号を憑ば魔縁近ばは一声於

念罪皆除と念むとてなう来す牙の罪皆除とて浄土門各略を存し
 大畧を肝心と只往生の得否の信心の有る依唯此教を深く守信し行
 住座臥時處諸縁を嫌ど三業四威儀於心念口於忘息を専ら畢
 命を期とし此苦境界をか彼極樂淨土の不退土の往生し多し何疑ひ
 あらんやと教化し多し二位際なく覺び於此此戒を持て出家甘ん
 叶ふまやとやとて上人の家世人も戒を保つと常の習とて額か
 剃刀をあくと剃まねる十戒を授け中將隨喜の涙を流し身を受持
 多し上人も萬物哀の覺へか暮を公地しはく戒を規且る布地
 日來むとて遊れむの并み預け置且る現の多し知時を以取上人
 奉て是を人賜ゆり常の目の掛らん所置且る甘ん物ぞと臥臥の度
 念佛下さるのとやと上人涙ふと左右の返るもなる懐小入墨の袖

眼小押當黒谷歸らまける。件このの親八親を入道相國宋朝の皇帝の砂金を送らせり。類の希なる名品を徳仁に送り給ふ御の硯を送らせり。

重衡卿関東下向小松三位維盛卿高野山ゆく剃髮を

本三位中将重衡卿を鎌倉殿より頼み下さる故に下さる。土井次郎実平がより。九郎義経の宿所へ渡ります。同二月十日梶原平三景時の具をせんと。関東下らまける。西國ゆく生害もせ都へ上らる。口惜く人今更

関東へ教とんかの中。推量らまると。四宮河原成ぬ。昔芙蓉喜第四の皇子蟬丸関の嵐めを登り琵琶を弾ひ。小樽雅の三位と云入風の吹日も吹ぬ日。雨の降夜もぬ。夜も二年が向歩を運びま。彼二曲をば。葛屋の床の古き想像と。悔に相坂山打越と。勢田の長橋長くとも東の渡を

駒ちりぐ。屠所の羊の歩も雲雀昇且野路の里志賀の浦浪春か。曇る鏡山比良の高根を北ふ。伊吹の出高も近づぬ。ぬを面と。荒く中々優。不破の関谷の板廂。小鳴海の潮干浹ぬ袖。不且。彼在原の某の衣き。馴ゆと。二河國の八橋ゆも成ぬ。蜘蛛手。小物をひつ。濱名の橋を打渡。松の梢か風。入江ぬ。浪の立。でも。物憂め。夕間暮。他田の宿。彼宿の長者が娘。侍。并小宿せ。侍従三位殿を。日本傳。石守。給。人。今日。を。一首の歌を。空赤土小谷の。御の。重衡卿。返。せ。放。心。も。後。心。も。後。心。も。後。心。も。

重衡卿返せし

放心も後心も後心も後心も

良き中將権原を召さ。さとも唯今の歌の主のつらる者ぞ。さとも仕
てこののたかたと宜く景時や君のたまご知一召さのたかやあはれそ八島の大
殿のまご當國の守ゆくあせし時召さの最愛のひの老母を召さめ置
一が常の暇を乞ふ衣給りさ。比を赤生の始ゆくもいん
いふせんぬのまも惜るまごをまし。妻乃をなやあらん

と詠く暇を賜り下すのひ。此海道一の歌入ゆくのちける。能野の文侍従を直直能
只都をかく日敷歴且弥生も半過春も既暮んと。遠山の花を残の雪
とこ浦と嶋と霞渡り。越方行末のたごひつげあふも。さとも宿業
の方見ぞと。及せぬの涙を。子一人もあなを。母の二位殿も歎は。比の方大
納言典侍殿も。本意より。萬の神佛も初ら。一が験あり。賢うぞあ
かりける。子ごゆもあふ。いふ斗らあふとあふんと宜ひ。佐夜中山あふとあふ

ゆも。越べりともえね。ぬる哀の数そのひと。袂さくく儒増る。宇津の山
辺の鳥の道は細くも打越と。も越をもる行か。北は遠ざり。雪自き山は河ハ
甲斐の白根との。其時三位中将落も涙を拭ひ

惜かぬ命あは。今日とあは。はとあは。ひの白根ともさ
清く。関を打越と。富士の裾野か成ぬ。北は青山嶽と。松吹風索と
る。南の蒼海漫と。と岸打浪も。亦心は。瘦ぬべ。恋せはも
あつらりと。明神の歌ひ始給ひけん。足柄の山を越。小餘綾の森。鞠子川。小磯
大磯の浦と。紙上が原。脚裏が崎を打過。自心ぬ旅と。日敷。彌生。鎌倉
着。うらりの。玄程の鎌倉殿。中将の對面。と。抑頼朝君の。懐も休
め。亡父の恥をも清くと。立上。平家を亡。鳴んと。案の内。存せ
し。正。か。め。目。掛。らん。と。存。此。定。八島の大。臣。殿。の。存

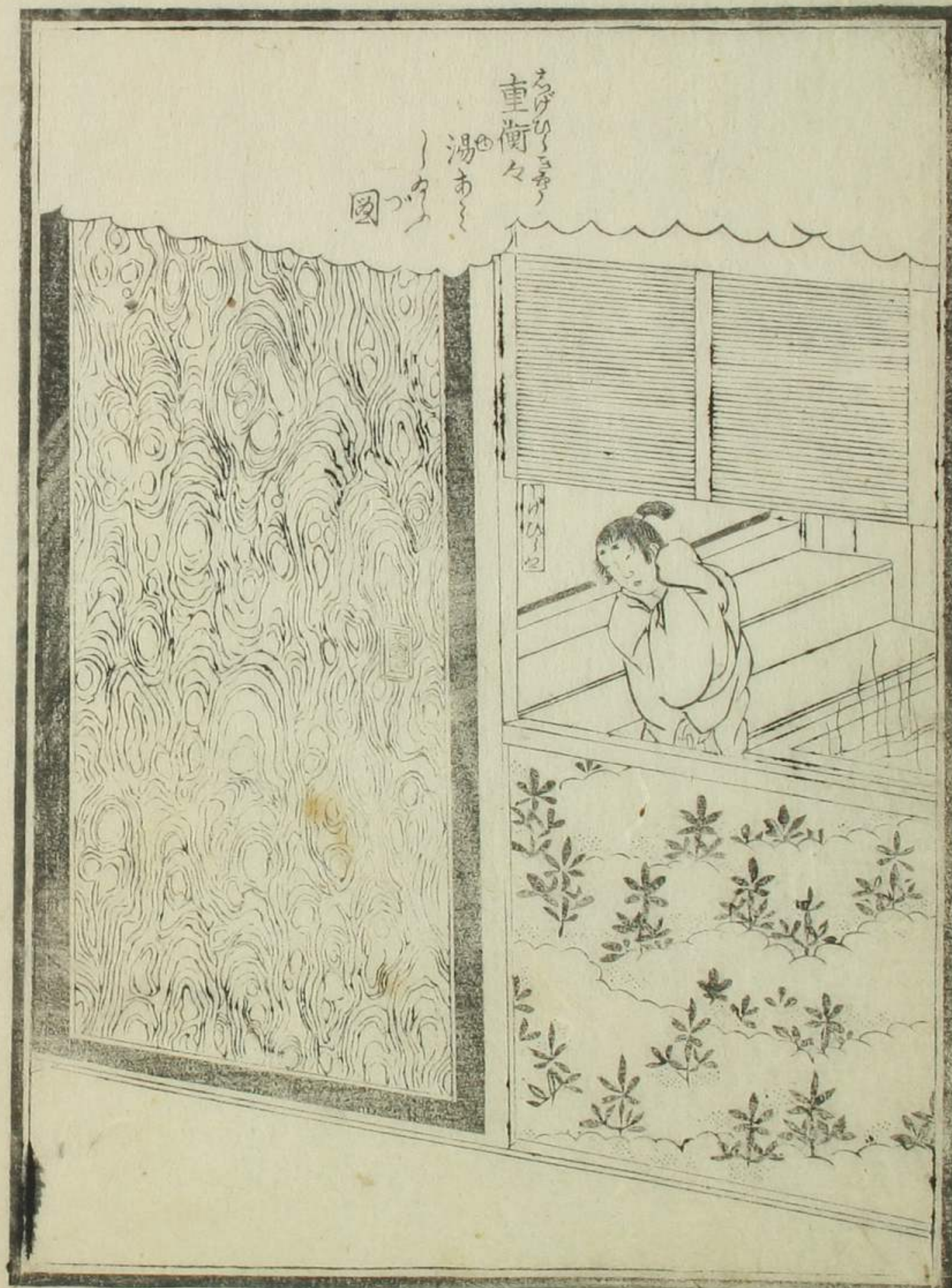
ゆも入ぬ。一儲南都炎上のあゝ。故入道相國の成敗のひ。時めえとの
ゆ計ひ。以の外の罪業のいと。やとをれを。三位中将聊臆する。餘ある。答
らる。様先南都同祿のと亡父入道の成敗ゆ。其が私の発起ゆ。い。衆後
の悪行を靜ん。向ひ。程。不慮の焼亡ぬ。及。力。及。さ。次第。之。新。死
ゆる。ゆ。ゆ。昔。源平。左右。別。更。朝家。の。堅。め。り。も。近。比。源。氏。の
運。傾。り。人。皆。存。む。就。中。當。家。ハ。保。元。平。治。以。來。度。々。朝。敵。を。平。げ。勸
賞。身。の。餘。り。忝。く。も。一。天。の。君。の。御。外。戚。と。亡。父。入。道。帝。の。御。外。祖。と。依。り
入。臣。の。位。を。究。准。后。の。宣。旨。を。賜。り。一。族。の。昇。進。六。十。餘。人。廿。餘。年。が。以。來。も。
官。加。階。天。下。の。肩。を。比。る。者。も。い。え。ん。と。い。ふ。付。い。と。帝。王。の。御。敵。を。討。つ。者。ハ。
七。代。迄。朝。恩。を。と。り。極。と。僻。る。ゆ。と。そ。い。ひ。え。ぬ。其。故。ハ。親。故。入。道。相。國。
君。の。心。の。命。を。失。ん。と。ま。る。と。度。々。及。ぶ。と。い。ふ。も。其。身。二。代。の。幸。ゆ。と。子。孫

か。や。成。べ。る。運。聲。世。乱。と。都。を。か。後。之。骸。を。山。野。に。曝。し。罵。れ。ん。と。
西。海。の。波。流。さ。る。と。そ。存。せ。し。生。ち。り。囚。と。し。と。下。り。と。い。ふ。努。り。存
いて。唯。先。世。の。宿。業。を。そ。口。惜。う。へ。但。一。般。湯。ハ。夏。臺。に。囚。と。文。王。の。爰。里
に。囚。と。云。文。あり。上。古。猶。か。く。の。お。と。況。や。未。代。に。於。て。を。可。前。取。身。の
敵。の。命。を。渡。つ。と。命。を。失。つ。と。全。く。辱。め。と。愧。ぢ。る。唯。芳。思。の。疾。く。首。を
刎。ら。る。と。其。後。ハ。物。を。も。つ。と。梶。原。是。を。兼。つ。と。天。晴。大。將。軍。と。い。ふ
涙。を。流。せ。侍。方。も。皆。袖。を。濡。し。ける。鎌。倉。殿。も。誤。め。哀。れ。の。と。け。且。抑。平
家。を。頼。朝。が。私。の。敵。と。努。り。ひ。や。さ。唯。帝。王。の。仰。の。重。う。た。ま。へ。と。い。ふ
南。都。を。亡。び。と。い。ふ。加。藍。の。敵。と。い。ふ。大。衆。定。り。音。の。あ。ん。と。伊。豆。國。の。住
人。狩。野。少。宗。茂。が。頼。ら。と。ける。其。弊。冥。途。ゆ。と。安。樂。世。田。分。の。罪。入。を。七。日。く。み。す。と
の。み。へ。渡。さ。る。と。い。ふ。く。や。と。い。ふ。と。表。し。ゆ。と。い。ふ。狩。野。少。宗。の。情。ある。者。ゆ。と。い。ふ。一。身



五家物語圖會卷之十一

十一



湯あ
重衛々
國つ

五家物語圖會卷之十一

十五

當アヤサシ様と勞ア素々せ。剃湯殿飾あんどく湯引せまる。中將道
 まつら汗甚一けま。身を清め失れんと必ひゆめ。二十許めく。色白う
 のか。誠み美し女房。目結の帷子染付の湯巻。浴室の戸開と入其跡
 十四五の女の童髪ハ袖長ありける。椽盤ふ櫛入と持奉先の女房介錯と
 湯引せ髪洗ひるこまり。叔ヤ根男まきようら。女ま昔一かろとく
 鎌倉殿より進せらるぬ何ゆくも必石ころあふ兼アヤサといひつと中
 將今まかるとの何をうらむべ。唯女家仕度とやうら。彼女房鎌倉殿
 々あふ其儀ハ叶ふま。朝敵とく預まるとは私の敵と異ちるを仰ゆ
 其より中將ヤ一ま行し。中將守護の武士ハ唯今の女房ハ優めつて
 の哉名ハ何と云と問ひる。狩野介あまの越の長者が娘ハ眉目汝女
 なるころる者ら。此二三年鎌倉殿石置と十手前とヤいごと答々其

夕雨少一降と物凜一ける折あ。件の女房琵琶琴をせまら。狩野
 介も家子郎ホ十餘人引具。中將の御前近うひひる酒を勧め奉り。
 十手前敵をみ中將少一清いと與なげあけ。狩野介ヤうらへは
 召れくもゆらん宗茂本伊豆の者めといへ。鎌倉を旅めといへ。及ん
 ば公仕といへ。何れも必口あふ兼アヤサと鎌倉殿仰いそ。何
 ゆくもヤ。酒勧めのへと云と十手前羅綺爲重衣。妬無情於嫩婦と
 玄朗詠と画又一つりけと三位中將此朗詠をせん人。北野の天神毎日
 三度翔く。とんと折言せぬとあり。ちとども重傷ハ今生ぬて。と捨らん
 奉り。身ま助音。くも何子。但一罪障軽とぬ。極楽を願ふ
 一と宜へ。十手前を。雖十惡猶引撮と。玄朗詠と。極楽を願ふ
 人の皆弥陀の名号を唱へ。と云今様を四五返唄ひ澄し。と云。其時

中将盃を傾けり。千手前給つて狩野介めさる。宗茂が飲時め琴を弾き
 一音中将普通通ぬ。此樂をむ。五常樂といふも。今重衡がむ。此樂がと
 よそ叙をむ。頃々頃々往生の急を引んと戲也。琵琶を取。數柱を捨て。皇軍
 の急をむ。彈きける。かく夜も漸更萬公のまむ。あねがむ。わが吾妻の
 か。ゆ。優なる人のまむ。何るあとも。今一声と宜。千手前重なり。一樹の陰
 ぬ宿。合。同。流。且。流。探。も。も。か。先。世。の。契。と。云。白。拍。子。を。宜。ぬ。面。白。ぬ。と。云。
 ありけし。二。位。中。將。も。燈。閣。數。行。虞。氏。涙。と。云。朗。詠。を。せ。け。け。此。朗。詠。の
 意。昔。唐。土。の。漢。の。高。祖。と。楚。の。項。羽。と。天。下。を。争。ひ。合。戦。す。と。七。十。二。度
 戦。ふ。度。の。項。羽。勝。ぬ。と。云。と。竟。ぬ。項。羽。戦。ひ。つ。り。亡。し。時。驩。と。云。千。里。の。名。馬。の
 衆。上。虞。氏。と。云。寵。愛。の。美。夫。人。と。具。し。逃。ま。ん。と。さ。る。ぬ。と。云。と。云。馬。働。ぬ。項。羽
 涙。と。云。我。威。勢。盡。す。敵。の。襲。ぬ。數。多。し。唯。虞。美。人。別。見。え。ぬ。と。云。

歎。且。燈。閣。成。り。虞。氏。の。細。け。涙。を。流。す。夜。も。深。行。す。小。軍。多。四
 面。小。崗。を。作。る。愁。の。ゆ。さ。る。流。相。公。の。依。り。持。中。ね。を。と。ひ。ひ。口。号
 一。優。し。も。や。え。し。や。と。曉。近。く。も。る。と。狩。野。介。暇。や。と。云。ぬ。と。云。千。手。前。も
 罷。ぬ。其。朝。鎌。倉。殿。持。佛。堂。の。法。華。經。を。讀。み。坐。ける。如。千。手。前。歸。る。と。云。
 鎌。倉。殿。打。笑。さ。る。も。夕。べ。中。人。と。面。白。う。ま。つ。る。の。故。と。宜。ぬ。右。院。次。官。親。受
 御。前。の。物。書。と。な。ひ。ける。何。の。ゆ。え。か。や。ん。と。や。と。云。鎌。倉。殿。宣。平。家。の
 人。と。云。二。三。年。の。軍。合。戦。の。管。り。外。又。他。の。何。の。事。も。と。云。ひ。中。ね。の。話
 色。の。換。音。朗。詠。の。口。遊。終。夜。ま。つ。る。の。優。ぬ。艶。し。た。人。ぬ。く。座。け。り。と。云。美
 中。け。ぬ。准。も。夜。熟。ぬ。り。度。ゆ。ゆ。折。節。相。勞。る。と。云。の。て。呈。あ。る。此。後。も。云
 い。平。家。の。代。の。歌。人。丈。人。達。ぬ。流。を。せ。ぬ。先。年。あ。る。人。を。花。小。輪。と。云。ひ
 一。少。此。三。位。中。ね。殿。を。牡丹。小。輪。と。云。ね。鎌。倉。殿。と。云。後。も。云。と。云。

云か。此中將の記。臣朗詠ハ類希らるる。宣ひ。其後中於南都(度
 是斬と多入と。又一。千ヶ前の中。物多みの種と成。小々。空谷
 亦濃墨。深の窠果。信濃國善光寺。入と行。彼卿の後世。善提を
 吊ひけら。借又小松。三位中將雅盛卿。八高。在と。都
 通の。故神の。置れ。北の方。稚入。の。身。と。立。添。忘。間。も。あ。り
 一。ま。あ。ひ。の。我。身。久。と。壽。永。三。年。三。月。十。五。日。曉。八。高。と。珍。出
 与。之。肅。重。景。石。童。丸。と。云。童。奴。ぬ。の。一。武。里。と。云。舍。人。三。入。の。具。一
 阿。波。國。結。城。浦。より。松。の。系。鳴。門。の。仲。と。紀。伊。路。へ。赴。和。歌。吹。上。衣。通
 姫。の。神。と。頭。れ。る。玉。津。島。明。神。日。前。國。懸。の。御。前。と。紀。伊。の。淡。小。着
 尾。と。山。侍。の。都。上。で。恋。れ。者。共。と。今。一。度。見。む。と。と。け。と。叔。父
 本。三。位。中。將。殿。生。捕。め。け。と。京。鎌。倉。の。耻。と。晒。と。口。惜。と。此。身。も。囚

ら。む。八。入。の。亡。骸。と。耻。を。被。れ。ん。も。公。憂。と。千。度。公。す。あ。と。心。ぬ
 公。と。か。う。ひ。と。高。野。御。山。へ。あ。り。あ。る。年。来。知。る。聖。あり。三。條。の。存
 藤。左。衛。門。茂。頼。が。子。の。存。藤。滝。口。時。頼。と。本。小。松。殿。の。侍。の。一。十。三。の。年
 本。所。へ。ま。り。建。礼。門。院。の。雜。司。横。苗。と。云。女。わ。り。瀧。口。尾。の。最。愛。と。父。此。と
 傳。世。せ。ぬ。ん。者。の。誓。め。も。う。と。仕。と。も。公。安。う。と。せ。ん。と。あ。の。由。ち。死。者。を
 初。と。強。め。辣。け。し。瀧。口。や。ける。や。西。王。母。と。云。一。人。も。昔。在。と。今
 東方。朔。と。穿。者。も。名。の。安。眼。か。え。の。老。少。不。定。の。境。唯。石。火。の。光
 異。と。縦。ひ。入。長。命。と。と。七。十。八。と。其。中。の。入。る。と。あ。る。縁
 ぬ。竹。餘。年。心。夢。幻。の。世。の中。の。醜。死。者。と。片。時。も。見。と。何。ぞ。ん。り。死。者。を。ん
 と。と。六。父。の。命。と。背。く。足。善。知。識。と。多。く。浮。世。と。公。と。実。の。道。入。ん。と。と
 十九。の。年。髪。と。切。嵯。峨。の。往。生。院。の。行。ひ。澄。一。居。と。横。苗。尾。と。安。我。を。持。を

三ノノ...

姿を換えたる恨しき。縦ひ世を背くとも。まろはかくと知らせり。入るそ
 公強くとを尋ね恨んと。或暮方都と云。嵯峨の方へ行く色也。比々如月十日
 了。梅津の里の春風。餘所の匂も發衰く。大井河の月影も霞も著く。籠の方
 みるぬ哀も。准の衣とて。あひひけぬ。往生院と云。あつとも。何色の坊に知れ
 る。衣のあひ排徊。住わぬ。僧坊の念佛の声を。籠口入道。声を燈
 具して。女も云。せ。心姿の換。成えり。えんる。さ。い。と。知せ
 け。籠口入道。胸お唄。障子の間より。覗き。裾ハ露袖ハ涙。打。絞。つ。少
 浮瘦の顔。滅ぬ。訊難。う。形勢。の。大道心者。も。公弱。成。成。籠
 口入道人。を。全。見。入。人。の。門。遠。の。い。と。云。せ。横。田。の。情。を
 恨し。け。ど。も。力。及。ど。候。る。が。帰。す。其。後。籠。口。入。道。同。宿。の。僧。の。語。り。へ
 ろ。も。世。の。困。ち。念。佛。の。障。碍。い。て。も。あ。く。別。一。女。も。栖。居。と。云。え

いぬ一度ハ公強くとも。又も暮々。と。わ。ぶ。公。も。動。死。い。ひ。る。暇。や。と。高。野。上。高。野
 浄心院。の。行。ひ。澄。一。居。も。横。田。も。頭。と。女。を。昔。と。云。え。籠。口。入。道。一。首。の
 歌。と。送。り。け。る
 横田は返すの外
 そ。か。さ。さ。も。何。う。と。ん。様。行。か。ひ。む。だ。は。公。の。極
 其。後。横。田。の。奈。良。の。法。華。寺。在。一。が。の。積。り。程。ち。身。罷。ぬ。籠。口。入。道
 尺。之。と。交。哀。と。増。了。弥。行。ひ。澄。一。且。父。も。不。孝。と。免。し。親。き。者。は。皆。高。野
 の。聖。と。ゆ。り。雅。盛。つ。是。の。尋。逢。く。兄。弟。の。都。亦。在。一。時。ハ。布。衣。立。烏。帽。子
 衣。紋。路。ハ。賢。撥。撫。花。中。あ。ら。男。ハ。一。が。出。家。の。後。今。日。初。と。兄。弟。ハ。三。十。而。也
 成。さ。る。老。僧。姿。ハ。瘦。衰。袈。裟。衣。香。の。煙。ハ。入。墓。下。の。ひ。入。ら。道。心。者。ハ。中。將

と見えぬ。この現も見えぬ。何となく此御山へと向進さる中將と云ふ。西園
をへ入るべく小落下りし。故郷の笛一妻子の仰身ゆ立添。忘る向うは襟
の心相む。大臣殿も二位殿も。此人へ他大納言の様ゆ頼朝の心を通し。二心あるん
と云ひ隔る間。心留らざ。是をわづかむ。そのはやくは家。火の中水
の底へも入るとも。熊野奈宿の宿志わす。果しく後と悟らしけ。の
滝口入道中けら。夢幻の世へ左とも右てもゆらん。唯永さ世の廟よそ公愛かへく
いと叔此僧を先達ゆ。堂塔を巡れ。奥の院へ来り。抑高野山へ帝都を去
と二百里。郷閭を離れ。人声絶。暗嵐梢を鳴。夕日の影。八葉の安八
の谷。滅ふかも。花の色。林霧の底。笈び鈴の音。尾上の雲。小響。尾の
松生。垣の草。星霜久しく。昔延喜の時の夢。想心ると。捨皮色の
御衣を。勅使中納言資澄卿。般若寺の僧正觀賢を相見し。此

御山の登り。御廟の扉推開き。御衣を着せ。霧厚う隔く大師
拜とあらば。賢深く愁涙。我悲母の胎内を。師匠の室へ入。禁戒
を犯さ。ささちと。拜ま。五體を地。投発露啼泣。漸
霧晴く月の出る。大師拜と。其時觀賢喜の涙を流し。御衣
を着せ。御髪長う生延。と剃き。勅使も僧正も拜し。石
山内供淳祐。其時童形ゆ。供養せ。大師を拜。深う悲死
沈。僧正ゆ。大師の依藤。推當ら。其一期。間。其
杵香石山の聖教。残。今も。三位雅盛卿。一山を拜し。其夜
を。窟口入道。春室。昔今の物語。深行。聖が行儀。と。至極甚
深の床の上。真理の玉を。後夜晨朝の鐘の声。生死の眠。と。其
らんと。世と。眞の。明。東禪院の知覚上人。清。出家

せんく。與之ま幣重景石童丸と召我ハ人まきぬ。此の身小添らる。道
 狭う。頃とがた身ちまはらぬ成るも。汝ハの立まへ。此比の世の人のそまは
 我の死後の都へ上り。牙もつけ妻も育も且の維盛が後世も吊べしと
 宣ふ。重景とくくと涙を流し。某が父與三左衛門景康平治逆乱の時。故殿
 の供仕。二条堀河の辺ゆ。鎌田多備と狙と。悪源太の討たれ。其其時。漸二歳
 故更の覚のほど。七歳ゆ。母の後は情と掛死。者一人もいり。故大臣殿の
 憐れ。我命の看ま。一者の子まはらとく。朝夕御前の養育ら。九歳の時。君
 の元服あり。一夜添くも頭を取上ら。盛の字の家の子まは。重の字と松
 王ゆと宣ひ。重景と召。召の叔又初名松王とやせ。生ま。五十七日。父抱て
 ま。此家と小松とい。祝と育ると仰ら。下ま。一各めくひ。先殿
 臨終の御前へ召。汝ハ重盛と父が形見と召。重盛の汝と景康が形見とく

と。今度の除目の頼負尉あり。父を呼ぶとせま。と召ひ。小の無慙
 との涙から。相構と少將殿の公の違はる。仰あり。昨日のあくとく。や。
 日ハ自然のぬる。あ。先命のま。存在一。成。是捨ま。死者と
 召ひ。入せ。耻。此比の世のあ。入ま。一の仰。源氏の郎等。及
 仰。君の神ゆ。佛ゆ。成。後。某。萬年の齡と保子と孫と。無量劫
 樂栄。あ。吾知識のい。先姿と香。迹。と仕ら。と。む。誓
 剪。口入道。割せ。石童丸も髻際。推切。同く入道。割せ。ら。
 此童も八歳。不便。加。者。維盛。卿。を。か。流。三
 界中。恩愛不能断。棄。思。無為。真。實。報。恩。者。と。二。反。唱。へ。終。一。山。田
 と改。多。中。將。と。與。三。玄。備。の。同。年。ゆ。と。廿。七。石。童。丸。ハ。十八。七。叔。舎。人。武。重。と。召。汝。ハ。是。
 一の八島。茶。端。と。も。數。添。と。覺。ま。人。と。ゆ。知。ら。せ。や。と。か。等。相。成。く。いと。



西園より左中将失ひぬ。一谷ゆへ備中守村にぬ。ゆへ各便を死に召しおくと夫
 のまを苦うの捕唐皮の籠。小鳥の木刀ハ平將軍貞盛以来維盛を精く侍とく
 九代ゆへ此後ゆへ運開けゆ上洛の折ゆへ。六代ゆへ給べと申す。都々此ゆへ
 終つて隠ともゆへけと。此ゆへ様をゆへ頼と姿を替んと申すゆへ宣ひ
 け。武里渡ゆへ咽ひまら。畏とゆへ何地送りゆ供り。ゆ専途見まら。左
 右も仕んとゆへ。其ゆへ召見せんと。瀬口入道ゆへ見せんと。高野と山臥修
 行者のゆへ立同國山東ゆへ。藤代の王子ゆへ。王子ゆへを伏拜と。千里の
 濱北岩代の王子の前ゆへ。狩裝束をる者七八騎ゆへ行遇ひ。堀捕んと申すゆへ。
 履切んと各刀ゆへを挿ゆへ。馬ゆへ下深く畏と透ぬ。此ゆへゆへ和まゆへ
 者ゆへ小あそ。雅とゆへと申す。足早ゆへゆへ。當國の住人湯淺權守
 宗重が子。湯淺七郎玄胤宗光。郎ホたゆへゆへ。向々ゆへ小松大臣殿の

ゆへ。二位中将殿。何とゆへ八島と道とゆへ。やゆ姿替と申す。与
 二之瀨石童丸も同くゆへ家。ゆへ供せると申す。近付ゆへ素ゆへ入んとゆへ。が
 却と迷惑もゆへんと。通りゆへ。哀ちゆへゆへと袖と顔ゆへ。當兩と
 位と申す。郎ホたも皆狩衣の袖と濡と申す。

小松三位中将維盛入道入水。宗清義氣佐々木守綱藤白の海を渡と
 中将維盛入道。熊野の岩田河を渡ゆへ。本宮澄城殿ゆへ上と。静ゆへ法施ゆへ。ゆへ
 御山の祭を泳ゆへゆへ。及ゆへ。大悲擁護の霞段ゆへ。熊野山の靈験と申す。
 無双の神明ゆへ音と川ゆへ跡と垂一乗修行の岸ゆへ。感応の月隈ゆへ。六根儘
 悔の度ゆへ。忘想の露も結ゆへ。ゆへ頼母ゆへ。ゆへ。夜深入定と申す。
 啓白ゆへ。ゆへ。七父重盛入道浄蓮。此宝殿ゆへ。命と百と。後世と助けゆへ。と
 祈誓言。奉ゆへ。感應ゆへ。き。殊ゆへ。當山ゆへ。本地阿弥陀如来ゆへ。ゆへ。座橋取と申す。

の本願誤む浄土へ導かれ且ハ雅盛故郷の苗置一妻子が於てハ安穩堅固の
 護り給へ。祈りて悲しむ。浮世を厭ひ実の道へ入給へ。女執ハ猶盡
 すと見え。哀れのしるもも明れば本宮より秘めく。新宮へまゝと。神藏と
 并るあふ。巖松高聳へ。嵐妄想の夢を破り。流水清く。熾きく。浪塵木
 の垢と條らん。明日の社佐野の松原打と。那智の御山へ入る。三重の浪
 落る。戀泉の水。数十丈攀上り。記音の灵像ハ山の上へ頭と。補陀落山
 ぞも智づ。霞の底の法華。續誦の声。つえ。天鷲山と。抑權現當山
 小跡と垂給ひ。以来我朝の貴賤上下。歩と運ひ。首と傾け。掌を合せ。利生ぬ
 顔と云と。僧侶費と双道俗袖を聯り。寛和の夏の比花山の法皇十
 三の帝位と。とせのひと。九品の淨刹と。行せ給ひ。庵室の旧跡。昔と
 及心と。老木の櫻。那智龍の僧。たの中。此三位中將殿と。都

ゆくえ知ると。同行ぬ。若ら。修行者。雅と。居る。あ
 かの夏も。小松大臣殿の嫡子。二位中將殿。あの殿の。四位の少将
 あり。安元の春の比院の御所。法住寺殿。五十の祝賀あり。小松殿
 内大臣左大将。叔父宗盛卿。大納言右大将。階下。看座。其外
 知盛卿。直衛卿。門の公卿。殿上人。今日を曠と。時め。垣代。中より。此
 中將殿。櫻の花と。挿頭と。青海波と。舞から。露。花の。風
 翻る。舞の袖。地を照。天も輝。女院より。白殿を。使め。御衣。衣
 ら。父の大臣殿。座と。立。賜。右の肩。女院を。拜。傍の殿上
 人の。美。内裏の女房。深。山。木。中の。揚。梅。と。流。石。下。と。果
 西。海。の。朝。夕。風。の中。妃。取。色。黒。其。人。と。流。石。下。と。

又拾つて。根を切る世の中と云ふは。痛く死ぬると。涙を浮べ。語る成
 安同行。雪の袖を絞ける。三山拜礼終了。濱の宮王子の御前。二
 位入道殿。上一葉の棹さし。遠の沖。山崎の嶋と云ふ。舟を寄岸。小
 上。大なる松の樹あり。八削ぐ。名跡を書付らる。祖父太政大臣平朝
 臣清盛公。法名淨海。親父小松内大臣左大将重盛公。法名淨蓮。二位中将維盛
 公。法名淨圓。二十七歳。壽永三年三月廿八日。於那智沖。入水と書付。又舟中。仲へ
 僧の身ひける。多ひ切ぬる道ちと云ふ。今への時。め成ぬ。流石を細く悲し
 かく。と云ふ。海路遙く霞渡す。唯大方の春。さゆも暮行空。物憂ふ。況
 や。今日と最後。唯今限の正。沖の釣。松浪消入と云ふ。沈むも果ぬを
 えぬ。ひとも。身の上と云ふ。己が。一列引連。今と。帰る。子。越路と云ふ
 鳴行も。故郷へ言傳せ。種武。胡圖の恨。や。多ひ残せる。隈も。こ

何れも。猶安執の。西向ひ。念佛。多
 公の中。今と。限。争。知。風の便。音信。今や
 と。俟。今と。合掌。乱。念佛。聖。向。憐。人の身。持
 き。妻子。今。生。物。後。世。菩提。の。妙。口。惜。か。うの
 弱。生。者。必。滅。の。理。と。先。速。の。不。同。あり。後。先。立。別。を。見
 ぬ。縦。ひ。百。年。の。壽。と。保。せ。此。別。何。も。唯。今。昔。と。云
 ぬ。驪。山。宮。の。夕。の。契。も。終。ぬ。甘。泉。殿。の。生。前。の。恩。も。終。ぬ
 和。漢。例。同。第六。天。の。魔王。と。云。外。道。の。六。天。と。我。物。二。類
 中。中。此。界。の。衆。生。の。生。死。離。と。成。惜。と。或。妻。と。云。或。夫。と。云。是。之
 妙。ん。と。云。二。世。の。諸。佛。の。極。樂。淨。土。不。退。轉。の。地。ぬ。劫。め。入。ん。と。一。切。衆

生と子の如くは百のちも妻子は無始曠劫より以来生死輪回する際なきに佛
 の重く戒めり。さすべし公弱くは百のちも源氏の先祖伊予入道頼義の勅命定
 奥列の夷。安倍貞任宗任と責多し。時頸と斬と一萬六千餘人其外山野の賦
 江河の鱗其命を絶と幾千万とあるは是れ終焉の時一人の菩提心を發せ
 ぬ依と。往生の素懷を遂と是れ一とや就中出家の功德莫太るは先世の罪
 障は皆亡びぬらん。七宝の塔を建。高と二十三天に至るとも。一日出家の功德
 及べぬと云り。罪深かり。頼義も公猛がのるは往生正念と。君はさけるは罪
 業も至り。犯列燈戒殿の本地弥陀の名号一遍若く十遍信心堅固疑なく
 唱るるのるる。六十萬億那由多恒河沙の如身と縮め。丈六八尺の如形ゆゑ親
 音勢至無數の聖九化佛菩薩。百重千重圍遶。妓樂歌詠。唯今極樂
 の東門を引接来迎。多らん。如身と著著海の底に沈むと云々。紫雲

乗るべし。成佛得脱。悟之用き。如女妓女の故郷に立歸と。妻子を導死
 のん。還来楡園度入天と云。少も北の如く。頻々鐘打鳴。念佛を初
 めま。中將も然るべし。善知識と云。忍ち安執を離。西向と合掌。高
 声の念佛百返。唱へ多し。南無と唱へる声は海に飛入多し。與に兵衛。
 石童丸も同く御名を唱へ。續と海に沈む。舍人武里も續と海に入ると
 け。聖取留君の如遺言。違へらば。今ハのちも存命と。如遺言を以て
 せよと。或ハ叱入。宥くは。如くも夫と公の如く。悲しみの餘り。何夏も
 船底に轉び倒れ。喚き叫ぶ其形勢。來心陀太子檀特山へ入る。一
 時車匿舍人金泥駒と賜つ。王宮の還り。悲し。是れ如く。と云。如く。存命
 や上。如く。誓。如を推廻。是れ如く。二人は深く沈く。如く。誓。經續
 同向する内。日も入海も。如く。空。舟を漕飯る。門渡る船の權の平。聖

袖もむゆの涙とる何とぞとどろろ。聖の高野へ歸。武里八島へまけり。
 ぬ宗新二位中将殿資盛。ぬ大文士かまきふ。ぬ公恩を我れに程に
 ぬひ給ぬる。さく引具く二所中沈果多ごと。さくぬ敷き死ぬぬ。ぬ外
 ぬぬ知のちろりとと尋らる。ぬ詞もつらとく。遺言の次第一。且唐皮小鳥の
 ぬ具ぬ若ヤとて。今ハ我身とくも存ふべとて。ぬぬぬとて。袖を顔も推當
 位ぬ大臣殿も二位殿も。此人ハ頼朝ぬ公を通り。都へ行ましとのとぬ居られ
 ぬ。今更岡熊と給ひつり。四月朔日都ぬ改元ぬと元曆と號と。其日陰自行
 ぬ。鎌倉征夷大將軍頼朝卿。從五位下より五階昇と。正四位下ぬ叙せと。同
 二日崇徳院を神祀らる。昔ぬ合戦ぬ一火炊御門が末ぬ社を建と。宮裡一
 ぬ。是ハ院のぬ沙汰ぬと。内裏ぬ知一石とどと。五月四日池大納言頼盛卿
 關東へ下向ぬ。是ハ鎌倉殿常ぬ情と。全疎ぬ存やと。故尼御前とのぬひそ。

八幡太神とを。誓言状をも遣と。此度使者を以て急ぎ下り給と。ぬぬぬ
 相傳第二の侍。弥平と齋宗清と云者あり。相見せらんとぬと。君ハかく渡らせ
 ぬ。ぬ一家の公達。西海ぬ漂ぬぬ分苦。ぬ程ぬ世間の旅をもぬの上ぬ跡より
 ぬ。ぬと。頼盛卿耻らる。二門ぬ引別と。吾身ぬ美と
 ぬ。ぬ流石身も捨たぐ。命も惜さぬ在。大小の二向はぬ合とる上。清と
 ぬ。落雷と一時と。左の智さる。途の旅ぬ叛をぬぬと。送らるべと。中
 ぬ。宗清居直。畏と人の身ぬ命程惜さる。ぬぬを依留。ぬ悪と。存ぬぬ古
 衛佐も命を助けと。今幸ぬも途の流罪せと。時故尼御前の仰ぬ
 江の原の宿を送り。今ぬ志と。ぬ供ぬ下らんぬ。定と。饗應
 引ぬ物と。ぬ。夫ぬ付と。西海ぬ門。又ハ同隸たの田邊ぬぬぬ。ぬぬ
 途の旅ぬ執せと。頼朝を攻ぬ下る。先陣ぬ進ぬ。対死ぬ。此度ぬ

泰どともゆる方のみ。某の於て右美禰佐が二飯うりた賜んを致すて其の某が
 おのを相尋ば所勞るると仰せしと申す力及ぶ残りの同十六日頼盛卿鎌倉不
 着頼朝卿對面する先宗清のつとめ同と向て折節相勞工のと宜行のつと
 を勞するらん。猶意氣を存す小あそ。先年彼が許預け置きの時、その小
 觸情深くし。常の忘置む。供下へのと恋し待の怖し。も下への
 の哉と。知行多る庄園状に餘り成儲さす。の引物給んと用意せり。す
 か。東園の大小名我れと。引物物の用意せり。下らば上下本意ある。た
 小る多。六月迄善美盡し。頼盛卿の饗應あり。同九日暇あり。皆一かく
 ても坐せか。と宜へも。都むも覺束る。つとめ頃と立給ひぬ。知行の私領
 庄園一所も相違有べく。大納言小成返さる。法白申す。杖鞍置馬三十
 匹裸馬二十四長持三十枝小金巻狛塗物風情の物を入と進せらる。東園の

大小名。面引物あり。馬をりも二百匹に多。頼盛、清盛入道の弟也。命
 生みのよあわ。旁德附と帰洛。同十八日肥後守貞能が伯父平太入道
 定次を始。伊賀伊勢兩國平氏隨從の族江に打。源氏の末葉等発向七
 合戦。及び同九日攻敗らる。昔の好意忘と。殊勝る。立立るけ
 ありと。世の二百平氏と云ふ。叔父散在。三位雅。幽卿の北の方。絶て久
 しの音信。使を仕立八島(遣さ)。高野の剝髮熊野三所。皆
 一。多。那智の沖へ主従入水。具知。叔。声。悲
 悲。若君六代御前の乳母。今更。本。今更。今更。
 の。囚。成。京。曝。汁。今更。今更。今更。
 後。願。家。今更。今更。今更。今更。今更。今更。
 亦。追。第。一。謙。尼。世。味。



哀ある鎌倉殿此由とやと隔るう打向ひても座とが命斗りへ助へん故也禪
 尼の使としく頼朝と流罪の宥らとへ偏ぬ彼内府の芳思も其名残の人も其
 疎めもひびやさくなくお家もせんと上の子細め及さるし成と涙と三とと
 名却後續列八島ゆて東國より大軍寄るも沙汰も鎮西より白林白次松浦水
 押寄きたやと多ふ一合ぬ将士多く亡び力も盡るも阿波民部少輔重能の兄宗
 四國の者尤と培ひし成高き山深き海も頼とぬ七月廿五日ゆ成る所女房指漆
 こぞ
 ひ去年の今日京都落ゆわらわ浅猿かりとた培お位つた大つゆひる廿八日
 於中新帝御即位なり三種の神器あて即位の例廿二代是ぞ始と承る同八月
 六日除目ぬ浦冠者受領る九郎冠者左衛門尉成使の宣旨と蒙る九郎判官と
 下ふをま行ゆ萩の上風もや才小入萩の下露も珍敷く恨る貴の声も相乗打戦さ木
 葉の散るる深行秋の旅の空の悲かたなり平氏の面も昔の雲の上の春の花と

詠ひ今八島の浦の秋の月小悲九扇月と眺ても秋の今夜のそんと想像涙
 と流し心と流し明暮拾る左馬頭行盛
 君よめくもも井の月を舟に移るるありとま

同九月十二日大將軍從五位下範頼平家追討としく西國へ打立ち相作入る
 足利藏人義兼北條小四郎義時在院次官親義侍大將ゆ土肥次郎実平
 子息弥太郎遠平三浦入義澄子息平六義村島山庄司次郎重忠同長野
 二郎重信佐原十郎義連和田小太郎義盛佐々木二郎盛綱土屋二郎宗
 遠天野藤内遠景比企藤内朝宗同藤四郎義員八田四郎武者朝家女西
 二郎秋益大胡二郎実秀中條藤次家長一品房章玄土佐房正俊是木を
 先としく二分餘騎播磨の室の着るける平家方の大將軍小松新三位中将
 資盛 重盛 同少將有盛 四男 丹後侍從忠房 五男 侍大將中次郎去齋

盛續上総五郎兼忠先惡七之備景清を先とく。五百餘艘の兵船を列し。備前の児島に着て。源氏の室を立。備前西河尻藤戸の陣取海の内五町。舟楫を並べ。船を動かさず。廿五日の朝平家方より小舟乗出。舟を上と。爰を渡せし招き。源氏のまじいれんとて。空しくする。近江國の住人。佐々木二郎盛綱。夜ふ入と備の男一人。若らひ。直垂小袖大口白袴。巻をたき。駿河の浅瀬を向け。川の瀬に舟を并べ。月頭。東。月末。西。海の面。十町并の舟。彼方と先立。裸成渡。試みる。肩より鬚の濡る。処に聊も遊ぎ。其餘の舟も。先立。是れ。先ハ猶も易きとて。敵の矢先。裸ゆへ。行難し。と。女しく教と。夜歸する。下。鴈の口。あつと。又。や。入。教。んと。浦の男を。刺殺し。名。是。信。が。推。夫。と。刺殺し。名。迹。を。追。つ。明。る。廿六日朝。又。平家。より。一。船。を。出。し。招。か。さ。る。成。守。綱。滋。目。結。の。直。垂。緋。威。の。體。着。と。連。銭。草。毛。の。馬。の。金。

覆輪の鞍を置と打乗。郎等七騎打入渡え。範頼は多し。制し。笛と。宣。六。土。肥。次。郎。実。平。馬。を。馳。来。り。佐。々。木。殿。の。物。の。托。と。狂。多。ふ。大。將。の。赦。る。死。ぬ。返。し。給。へ。と。傳。は。れ。佐。々。木。耳。ゆ。り。入。む。深。々。と。泳。せ。浅。々。と。不。乗。速。急。不。押。渡。と。範。頼。え。の。ひ。佐。々。木。の。謀。と。ね。浅。き。と。渡。せ。と。宣。六。土。井。の。初。制。し。難。し。と。同。ト。く。續。と。渡。し。たる。大。將。も。下。知。る。由。也。三。方。餘。騎。皆。打。渡。と。平。家。是。と。え。と。舟。推。浮。へ。散。く。射。け。た。源。氏。の。舟。は。熊。舟。の。舟。舟。と。引。寄。喚。き。叫。ぶ。戦。ひ。一。日。戦。ひ。暮。し。双。方。の。員。多。く。夜。ふ。入。る。と。平。家。の。沖。の。源。氏。の。児。嶋。の。上。と。人。馬。を。自。思。め。る。範。頼。續。と。攻。ら。し。八。島。も。亡。ぶ。其。の。由。も。室。高。砂。辺。の。居。と。遊。君。も。手。酒。宴。し。多。く。堵。勢。の。い。ふ。多。た。大。將。の。悠。長。の。志。を。方。ま。り。し。平。家。も。皆。八。島。渡。歸。と。昔。の。馬。ゆ。り。川。を。渡。と。兵。の。ま。り。た。馬。ゆ。り。海。を。渡。し。先。陣。を。蒐。ま。と。我。朝。希。代。の。脂。る。も。と。鎌。倉。殿。の。教。書。の。載。ら。れ。備。前。の。児。嶋。を。佐。々。木。賜。り。同。廿八日。都。内。又。除。目。行。れ。

義経五位尉成九郎大夫判官とす。十月三日新帝御禊の行幸。前
 内井八徳大寺殿之玄。幸先帝御禊行幸。平家内大臣宗盛公節下の幄屋。小着て前
 内龍旗立居。氣色冠。際袖のかり表の袴。裾を勝とて。浴ぬ。其外和盛御車衛
 卿以下。近衛司三綱。小のれ。ま双が方も。今日大夫判官義経先陣。小供奉。本會
 杯。似む。疎の外京。別。平家の撰。屑も。楯。少。れ。同十八日大嘗會。形の如く。遂行。の
 治。兼。養。和。の。死。の。諸。國。の。人。民。平。家。の。怨。さ。と。源。氏。の。亡。亡。家。竈。を。捨。と。山。林。の。交。兵。春
 の。東。作。秋。の。西。收。と。管。め。及。む。如。何。と。か。を。の。大。礼。と。行。ふ。死。され。も。代。々。帝。王。の。先
 規。と。も。も。も。も。の。形。の。如。く。遂。行。と。す。此。年。も。竟。小。暮。ぬ
 武家評林の祝。ゆ。小松。惟盛。卿。那。智。ゆ。く。入。水。を。表。向。ゆ。実。入。道。と。す
 津川の辺。小。潜。隱。と。子。孫。も。後。世。小。遺。と。り。と。ぞ

平家物語圖會卷之十終

十

